

第2節 埼玉県稻荷山古墳の重要性

大塚初重

稻荷山古墳の重要性（Ⅰ）

埼玉県行田市字埼玉に所在する稻荷山古墳は全長約120メートルに達する前方後円墳である。1938年（昭和13年）に近隣の沼の埋め立て工事用に稻荷山古墳の前方部が削平され、直径約62メートルの後円部だけが残っていた。1968年（昭和43年）にいたって埼玉県は「さきたま風土記丘」構想の実現のため、この稻荷山古墳の発掘調査を企画した。この古墳が学術調査の対象に選ばれたのは、すでに前方部が失われていたことが大きな理由であったと思われる。2006年度にこの稻荷山古墳の前方部の復原が完了し、68年振りに築造時の姿に戻った。また同時に墳丘をめぐる周堀の復原整備も行われた。

稻荷山古墳の復原整備について重要な手がかりとなった資料は、1935年（昭和10年）頃に当時、帝室博物館の鑑査官であった後藤守一と考古課職員であった三木文雄が作製した墳丘測量図であった。

後藤守一は昭和年代の早い時期に静岡県磐田市松林山古墳を調査したり、群馬県赤堀茶臼山古墳、藤岡市白石稻荷山古墳などの発掘をしていた関係から、東国各地の拠点的な有力古墳について関心を持っていたのである。埼玉古墳群中の大型前方後円墳の稻荷山古墳に最初に注目して測量したことは、東国、特に北武藏の有力古墳群であり、古墳群中に8基の前方後円墳が系譜的な配列をしている中でも占地関係から初期の古墳であるという認識を持っていたからである。後年、後藤守一が筆者に稻荷山古墳の測量図を示しながら、いく度も埼玉古墳群の重要性について語ったことからも理解されるのである。

稻荷山古墳の重要性（Ⅱ）

古墳時代の研究上、研究対象とする古墳の重要性は、どれほどの古墳情報を提起しうるかという情報資料の多さによる。従って発掘した結果、主体部が盗掘を受けていたり墳丘が一部破壊されたりした場合は重要度が劣ることは致し方ないことである。

稻荷山古墳は1938年（昭和13年）に前方部が破壊され、その際に墳丘くびれ部付近から出土したと伝えられる高壙を中心とする須恵器一括と若干の土師器が学会には知られており、その形式から5世紀末～6世紀初頭頃と一般的には考えられてきたのであった。

1968年（昭和43年）夏の埼玉県による最初の発掘調査の結果、後円部上の2基の内部主体が確認され、それは礫槨と粘土槨であった。第一主体部とする礫槨は内法全長5.7メートル、最大幅1.2メートル、副葬品には画文帶神獸鏡・勾玉・銀環・金銅製帶金具・鉄刀・鉄劍・鉄鋒・石突・珪甲・鉄鏃・f字形鏡板付轡など馬具一式・鉄斧・鉋・鎬子・刀子・砥石などがみとめられた。第二主体の粘土槨は全長6.5メートル二段掘り土壙となっているから、木棺の長さは5.5メートル、巾1.1メートルという規模である。長さが5～6メートルに達し恐らく船形木棺と推定される礫槨・粘土槨採用の所属時期が問題となる。東国の5～6世紀の礫槨例は群馬県大泉町古海原前1号墳があり、礫槨3基と粘土槨1基という4基の内部主体を持ち、第2号主体の礫槨からは画文帶神獸鏡が出

土している。千葉県市原市姉崎山王山古墳の粘土櫛からは銀装環頭大刀をはじめ・胡簫・金銅冠・倣製鏡などが発見され、6世紀初頭の遺物相を示している。群馬県太田市高林72号墳では礫櫛から横矧板鉢留短甲が出土し5世紀末葉の年代を示す。

東国とくに北武藏や南武藏において横穴式石室が導入される年代は、6世紀前半代と考えられており、群馬県安中市築瀬二子塚古墳や前橋市前二子古墳の横穴式石室が例に挙げられてきた。茨城県八郷町丸山4号墳の場合では無袖式横穴式石室から滑石製模造品の出土が伝えられており、5~6世紀にかかるとしても横穴式石室の受容時期や人物埴輪と馬形埴輪の存在を考慮すると、6世紀前半という年代が妥当のように思われる。

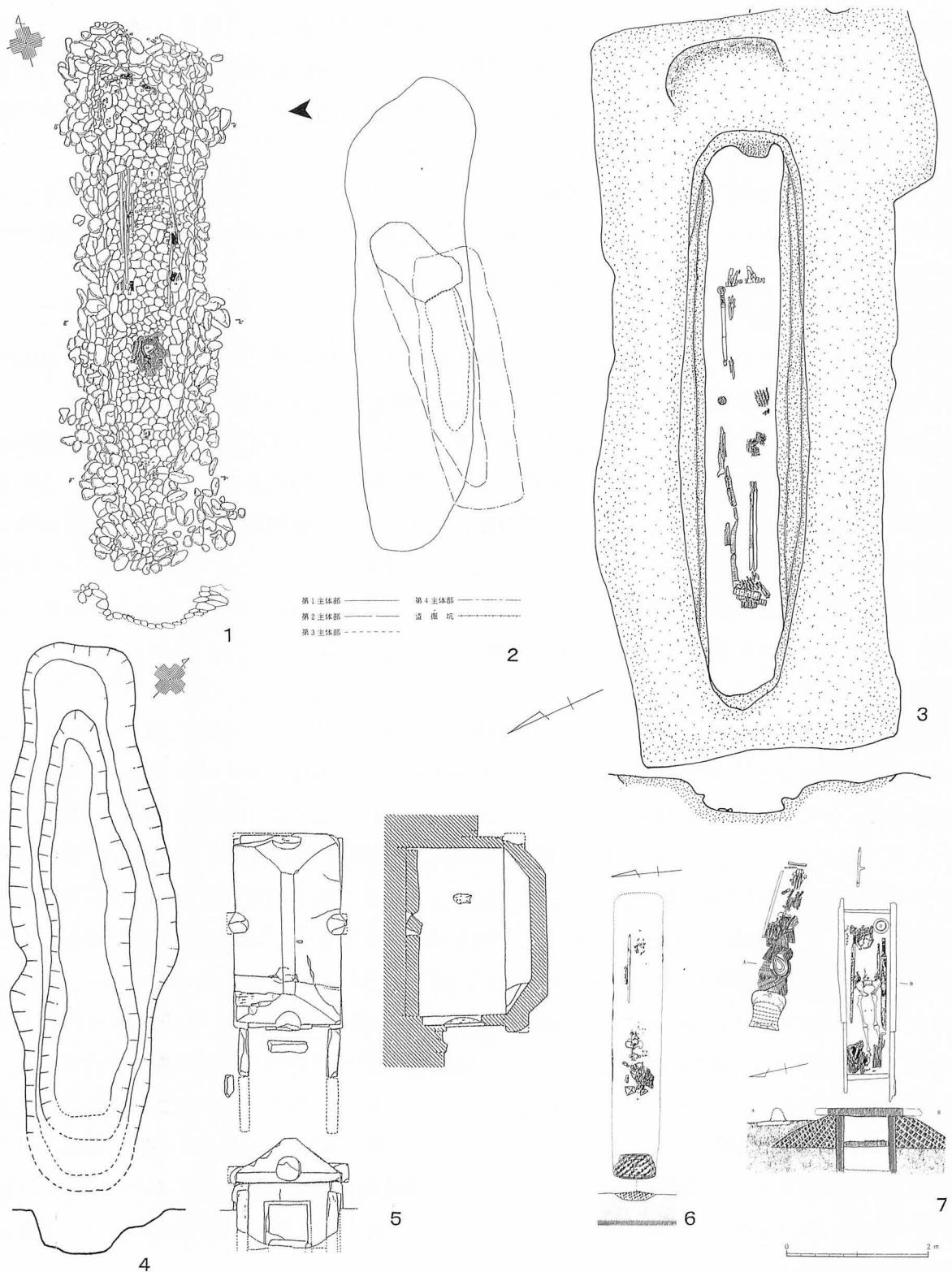
埼玉県稻荷山古墳が礫櫛と粘土櫛を内部主体としており、横穴式石室登場の前段階にあるとすれば5世紀末葉という埋葬年代を考えることも可能である。

稻荷山古墳の重要性（Ⅲ）

稻荷山古墳が日本考古学上、特筆されるべき地位を占めるのは礫櫛から出土した金象嵌銘鉄劍の存在である。1978年（昭和53年）に保存処理進行中の元興寺文化財研究所において稻荷山古墳出土の鉄劍の表裏に115文字の金象嵌銘文が発見されて「辛亥年」に始まる乎獲居臣家の八代をさかのぼる同属系譜と獲加多支歎大王が斯鬼宮にいて乎獲居臣が杖刀人首として近侍した状況を記している。「獲加多支歎大王」が日本書紀にいう「大泊瀬幼武」大王で雄略天皇であるとすれば「倭の五王」のうちの倭王武であり、「宋書倭国伝」に記す倭王武の上表文（478）の内容から倭王権と宋王朝との冊封関係と、倭王権と国内各地方首長との政治的関係が示される点で重要である。考古学研究における古墳時代研究の目標の一つには中央の倭王権による国内の支配体制、つまり政治・社会構造の解明がある。各地域間の有力な古墳を通じての歴史的な関係は、政治・経済・軍事など多様な関係を示している。1873年（明治6年）に発見された熊本県玉名郡菊水町・江田船山古墳から発見された鉄刀の銀象嵌銘文にある大王名が「獲加多支歎大王」と読めることになった意義は大きい。但し亀井正道のように大王名の読み方になお異をとなえる見解もあるが、古代史研究者の大勢は江田船山古墳と埼玉稻荷山古墳の刀劍象嵌銘文の大王名は「獲加多支歎大王」を承認していると思う。

従って5世紀後半から6世紀初頭にかけての倭王武の治世は、西は九州・肥後地方はもとより東国は北武藏地方までを完全に政治的にまた軍事的にも掌握していた倭王権の支配力を示している点で、稻荷山古墳の歴史的な存在の重要性は高い。

稻荷山古墳出土の鉄劍銘文にある「辛亥年」の紀年銘は471年と531年がさしづめの問題となる年号である。「辛亥年」に始まる銘文は主人公である乎獲居臣が、獲加多支歎大王が斯鬼宮に在った折に杖刀人グループの首として奉事していたことを記念し、自分の一門が古くから宮廷警固にたずさわっていたことの顕彰を記したものであるから、稻荷山古墳の礫櫛被葬者が乎獲居臣自身であると想定することもできる。しかしこれまでにも調査関係者が指摘しているように、後円部上における礫櫛と粘土櫛との位置が南側に偏していて、第三の主体部の存在が推測されている。稻荷山古墳の主軸線をやや外れている既存の礫櫛と粘土櫛の位置を考えると、年代的には先行する可能性のある第三の埋葬施設が存在するかも知れない。埼玉県は10年ほど前に地下レーダーによる探査を



1.埼玉稲荷山古墳礫櫛 2.古海原前1号墳粘土櫛と礫櫛 3.姉崎山王山古墳粘土櫛 4.埼玉稲荷山古墳粘土櫛 5.江田船山古墳家形石棺 6.江古田金冠塚古墳粘土櫛 7.三昧塚古墳箱式石棺

第106図 埼玉稲荷山古墳と同時期の古墳主体部実測図

試験的に実施したが、この時には精度的な限界もあって、明瞭な確証を得ていない。

稻荷山古墳に第三の被葬者が存在していることになれば、礫槨被葬者の先代首長であった可能性も出てくるが実証されてない点が弱い。また礫槨被葬者との系譜的な間系も問題となろう。辛亥銘鉄剣が礫槨被葬者の手に何時どのようにして渡ったのか問題であろう。このことは稻荷山古墳の礫槨への埋葬年代の決定に大きく影響する。

倭王権の中枢である倭王武と東国北武藏の有力首長との杖刀人としての従属関係を示すものであるから、471年（辛亥年）という年代は、5世紀の後半年代から6世紀初頭にかけての中央と地方との歴史的な関係を示している点でことに重要なのである。

稻荷山古墳の重要性（IV）

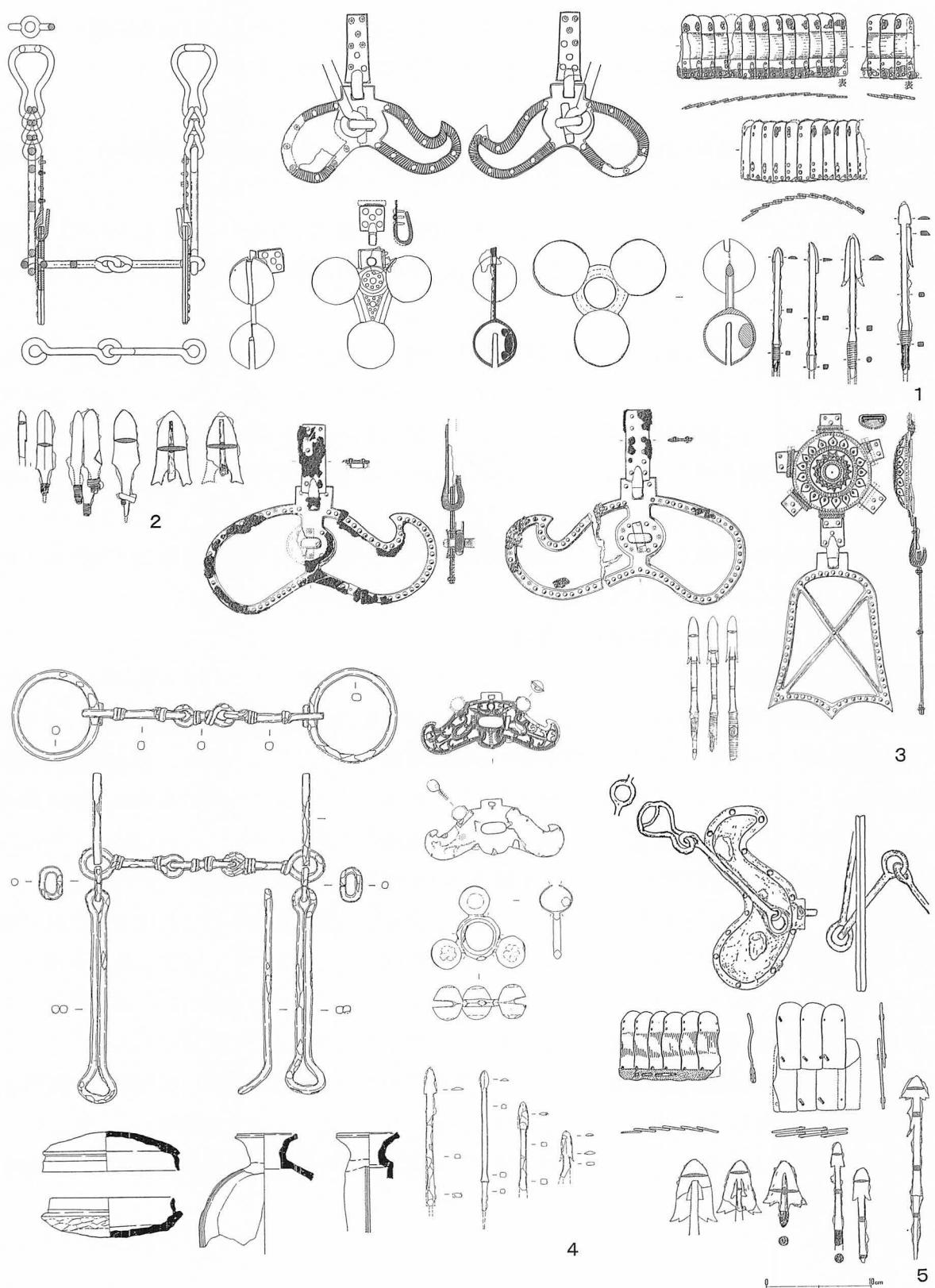
「辛亥」年（471）を認める立場に立つと、稻荷山古墳の礫槨副葬品の組み合わせは、東国をはじめ全国的な5～6世紀の古墳の変遷と編年に大きな影響を与える点で重要である。

稻荷山古墳の副葬品の中で古くから注目されてきたのは、くびれ部付近から出土した須恵器と土師器であり、平成年代の整備事業の際にも墳丘くびれ部付近から須恵器が出土している。これらの須恵器が古墳築造当時のものか、礫槨への埋葬時か、さらに粘土槨埋葬の時のものか判断は難しいが、田辺昭三氏の須恵器編年によるTK47型式の中に含まれると考えてよいのではないか。TK47型式の盛行年代を5世紀第4四半期に考えるとすれば、辛亥年の471年が示す年代と不合理にはならない。おそらく500年前後の礫槨への埋葬年代が妥当なところではないかと思われる。

稻荷山古墳の考古学上の位置づけ

古墳時代の地域的な研究が進展する中で、各地に古墳研究の核となる主要な古墳が存在する。古墳の変遷と編年を詳細に見るとすれば、何よりも古墳の内容が多様でありメルクマールとなる主要な遺物を持っていることが必須な条件となる。関東地方とくに北武藏で稻荷山古墳が考古学上の定點になりうるとすれば、内部主体である礫槨と粘土槨の存在であり、鏡をはじめとする刀剣・馬具・帶金具・鉄鎌などの副葬品の組み合わせであった。鏡では画文帶環状乳神獸鏡が同型鏡を出土した古墳間の関係があり、象嵌銘文を有する刀剣を所有する熊本県江田船山古墳との関係も、馬具の比較論から稻荷山古墳の5世紀末葉から6世紀初頭という位置づけが定まってくる。5世紀末葉という年代を示す定点的な古墳として茨城県行方市の三昧塚古墳がある。墳丘長80mの前方後円墳に箱形石棺と併行する副葬用の木箱とがあり、金銅冠・垂飾付耳飾・刀剣のほかに古式馬具・短甲・珪甲・衝角付冑など、稻荷山古墳副葬品との対比から同時代性が求められる。千葉県では横穴式石室登場直前の市原市江子田金環塚古墳があり、50m未満の前方後円墳の木棺主体部から、金銅装馬具一括のほか大刀・鉄鎌・玉類と須恵器があり6世紀初頭の内容を示している。同じ市原市の山王山古墳は粘土槨をもつ80メートルの前方後円墳であるが、鏡・金銅装環頭大刀・金銅冠・胡籠などが発見されており、6世紀前半期の特色を示している。

これらは埼玉県稻荷山古墳の推定年代より多少、年代の新しい古墳も含まれているが、副葬品中に5世紀末葉から6世紀初頭あるいは前半代と考えられる時代性を示す特徴的な遺物が含まれる。すなわちその古墳の特性—時代性とか被葬者の性格を示す遺品を有する例—が明確に示される古墳は、古墳研究上の地域的な定点となりうるのである。つまりその地域における古墳研究の基準と



1.埼玉稻荷山古墳礫柳副葬品 2.姉崎山王山古墳副葬品 3.江古田金冠塚古墳副葬品

4.江田船山古墳副葬品 5.三昧塚古墳副葬品

第107図 埼玉稻荷山古墳と同時期の古墳の副葬品実測図

なるのである。そうした意味合いから埼玉県稻荷山古墳は埼玉県のみでなく、ひろく東国あるいは全国的な古墳展開の中で、「倭の五王」である倭王武と北武藏の首長層との政治的関係を示している点で、東アジアの古墳研究の定点になっている点を強調しておきたい。

今後の課題

埼玉県稻荷山古墳が西暦5世紀後半から6世紀にかけての倭王権の歴史的発展動向を示す重要な古墳であることはたびたび指摘してきた。

115文字の金象嵌銘文をもつ鉄剣が稻荷山古墳の礫槨内被葬者の左脇から出土したので、最終的には礫槨の主が所持して黄泉国へ旅立ったのであった。礫槨の被葬者が乎獲居臣であったかどうか、多くの見解がある。

稻荷山古墳に関する最大の謎は、礫槨・粘土槨への埋葬に先行する初代の主の埋葬があったかどうかという点にある。後円部上における既存の2主体部の位置が南に偏っており、不自然な状況であり、古墳時代の5—6世紀代に同一後円部に3、4基の内部主体を有する古墳例もあることから、埼玉古墳群の生成過程を知ると同時に、辛亥銘鉄剣の入手過程についても疑念が解けるかもしれない。

稻荷山古墳は国指定史跡であるが、上述のような古代史研究上の重要課題を解決するためにも学術調査が実施されることを期待している。

さきたま風土記の丘と古墳群の保存・活用

日本における大規模古墳群の保存と活用例は宮崎県西都原古墳群とさきたま古墳群がとくに有名である。両古墳群とも整備が進められているが、前者は広域に良好な状態で保存されている古墳を、より高度な整備手法を用いて古墳の細部を見学させる方向で進んでいる。さきたま古墳群は稻荷山古墳の復原が完了したところで、古墳群全体を如何に整備するか、まだ全体的な整備基本計画が完成したとはいえない。稻荷山古墳の造り出し部の埴輪群調査を進めるか、二子山古墳など他の古墳の整備と区域内の構造物の問題など、まだ未解決の問題が多い。

一方、全国的に展開する古墳整備を見ると、都市公園化する整備が多く、これに対しては自然環境論、環境保全への意識が強くなっていると見られ、現地で見て、歩いて、考える傾向が強い。見学させて教えるのではなく、自分で考え自分で学んで知るという「学びの姿勢」に次第に変化している。サイン（説明板）の内容も将来、かなり異なった要望が出てくることと思われる。

二子山古墳周囲の菖蒲園など将来どうするか、豊後竹田市の七つ森古墳群（国史跡）では墳丘は自然の雑草、その周辺平地はすべて彼岸花という徹底ぶりで、秋の訪問客が激増しているという。

さきたま古墳群全域へのゾーニングで思い切った作戦というか措置をとることを考えてみたらいかがであろうか。